國學院大學学術情報リポジトリ

〔紹介〕青木周平著『青木周平著作集 下巻 古代文献の受容史研究』

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 多田, 元, Tada, Gen
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000357

〔紹介〕

青木周平著『青木周平著作集　下巻　古代文献の受容史研究』

多田　元

青木周平氏の著作集三部の最終巻である。上巻『古事記の文学研究』、中巻『古代の歌と散文の研究』という作品研究を中心とした論文集に対し、下巻は「研究史・受容史」をテーマとする。「作品研究・研究史」は青木先生の二本柱であった。

國學院雑誌第一一七巻第三号に、大学院時代からの知己である神田典城氏による上巻の紹介、同一一七巻第十二号にこの著作集の刊行を提言された近藤信義先生による中巻の紹介が掲載されており、お二方の深い哀悼の意が表されている。青木先生の広い研究領域、研究史への行き届いた目配り、温かくおおらかなお人柄などに言及され、その早すぎた逝去を惜しまれる思いにあふれている。それは青木先生に関わったすべての人の思いと重なるものであろう。従って今私がそれを繰り返し申し述べることは差し控えたい。

今回で完結するにあたって、これはお二方の文章と重複する部分もあるが、編集に当たった谷口雅博國學院大學准教授・倉住薫大妻女子大学専任講師・渡邉卓國學院大學助教各氏とそれ

を補佐した若手研究者の方々に御礼を申し上げたい。とりわけ下巻には三巻全体にわたる索引が付せられており、上・中巻の正誤表を含め校正などの編集作業に携わった方々の苦労に敬意を表したい。

さて本巻の目次は以下の通りである（各章の下の小題は省略する）。

第Ⅰ編　古事記の研究史・受容史
第一章　谷森善臣の古事記校訂研究（★）
第二章　テキスト・注釈書類の研究史（明治初期）（★）
第三章　テキスト・注釈書類の研究史（明治中期）（★）
第四章　日本神話研究の四半世紀の動向
第五章　明治期の『古事記』研究—明治十五年と明治三十二年を軸として—
第六章　古事記・日本書紀（国語国文学界の展望）
第七章　『古事記』を通してみた国学的研究—宣長から折口・武田へ—
第八章　武田祐吉の国学的研究—古事記を中心に—
第九章　武田祐吉の古事記研究—『古事記説話群の研究』を中心に—
第十章　武田祐吉の〈古事記学〉—講義ノートを通して—
第十一章　國學院大學図書館所蔵武田文庫の調査研究
第十二章　近代における「神観念」の形成—武田祐吉の『古事記講話』の価値—
第十三章　神口の表現と神観念
第Ⅱ編　日本書紀の訓読と研究史
第一章　訓読がひらくもの
第二章　『日本書紀』の訓注と〈訓読〉—巻第一の場合—
第三章　『日本書紀』の訓注と〈訓読〉—巻第二の場合—
第四章　「国常立尊」注釈史断章（★）
第五章　『日本書紀』一書論—本書から見た場合—（★）
第六章　巻第十四　雄略天皇
第七章　荷田春満の日本書紀歌謡研究—天智紀を例として—
第八章　日本書紀研究の展望
第九章　現代の『日本書紀』研究
第Ⅲ編　風土記・先代旧事本紀の研究史・受容史
第一章　風土記と記紀の関係—播磨国風土記オケ・ヲケ説話を中心に—
第二章　中世から近世にかけての風土記受容史の一斑
第三章　荷田春満の風土記研究—自筆稿本『出雲風土記考』

を中心に—
第四章　「天璽瑞寶十種」と石上神宮
第五章　『先代旧事本紀』研究の現状
補　『先代旧事本紀』の価値
第Ⅳ編　古代文献の書誌的研究
第一章　天理図書館蔵三浦本古事記の性格
第二章　『尾張國熱田太神宮縁起』の性格と古事記の引用
第三章　東丸神社所蔵『仮名日本紀』の諸本
第四章　静嘉堂文庫所蔵『日本書紀神代六首和歌古伝』
第五章　無窮会神習文庫所蔵『神代和歌釈』
第六章　縣居神社所蔵『日本紀歌割記』
第七章　『出雲風土記　春満考』（自筆稿本）と『出雲風土記考』（成稿本）
付　『新編荷田春満全集』刊行の経緯
初出一覧
解説（渡邉卓）
総索引（神人名・研究者名・事項）

各論文の詳細については、巻末の渡邉卓氏解説が丁寧に論じているのでそちらに譲り、ここでは青木先生の学問形成について紹介したい。

章題の下に（★）印を付した五本が、生前に出された著書『古事記研究—歌と神話の文学的表現—』（おうふう　平成六年十二月）に収められていた論文で、それ以外（三十四本の論文中二十九本）は全て単行本初収載のものである。この五本はそのまま前著の「第四〈研究史〉篇」を構成する論文であり、このことが青木先生の「研究史・受容史研究（文芸学史研究）」の展開を知る大切な指標となる。前著『古事記研究』は副題に「歌と神話の文学的表現」とあり、二十七本の論文中二十二本が作品研究で、五本のみが「研究史」である。本数の多寡を云々するわけではないが、一見「研究史」にあまり重きを置かれていないかの観がするかもしれないが、この前著のあとがきに次のように記されているのは注目されてよい。

最後に、本書の出版を快く引き受けて下さった及川篤二会長に、心から謝意を表したい。及川会長には、内野先生が生前企画された研究史シリーズの一冊、『古事記研究史』の執筆も、約束を果たさないままになってしまった。本書をもって約束にかえさせていただき、泉下の内野吾郎先生の御霊前に、本書の出版を御報告したいと思う。

この「研究史シリーズ（研究史双書）」は内野吾郎先生の発案で、先生の古稀の記念出版として計画されたものであったが、先生の急逝により立ち消えになってしまったものと私は伺っていた。青木先生がその中の『古事記研究史』を担当しておられ、故あって頓挫したのであろうが、常に脳裏から去らなかったものと思われる。前著では「研究史」の論文は五本のみであったが、そこに青木先生の強い思い入れがあるように思われるし、以降に著された本巻の研究成果の言挙げのようにも思われる。

内野吾郎先生は青木先生の大学院の指導教授であり、「文芸史研究・文芸学史研究」の必要性を常々説かれていた。内野先生は「国文学」という呼称が、この学問の理論体系の不備を象徴するものであり、その不備の一つが〈学史〉〈研究法〉が問われていないことであると説かれた。「国文学」という呼称は研究と研究対象を区別することのない、研究に対して無自覚な意識の表れであるとされ、研究対象を〈文芸〉、研究を〈文芸学〉と呼び分けるべきだとされていた。そして科学として成り立つためには〈理論部門〉〈歴史部門〉が必要であり、その〈歴史部門〉として、「日本文芸史」「日本文芸学史」の確立を目指すべきだとされ、『日本文芸史素描』（白帝社　昭和四十四年）『新国学論の展開』（創林社　昭和五十八年）『日本文芸研究史』（桜楓社　昭和五十九年）などの著作を上梓された。内野先生の業績については詳述する紙数がないが、青木先生が内野先生の理論を継承していることは本巻第Ⅰ編第七章から十二章の〈新国学と國學院の学統〉に関わる論文に顕著である。また青木先生が発案・企画の中心となり、調査・編集の先頭に立たれた『新編荷田春満全集』が國學院大學創立百二十周年記念行事として刊行されたが、その基盤に内野学〈日本文芸学史〉があったように私には思われる（荷田全集に関わる論文は第Ⅳ編第三章から第七章及び「付」）。

青木先生は大学院博士課程後期に入られた時、國學院大學日本文化研究所の所長であった内野吾郎先生の推挙により、日本文化研究所の嘱託となり、中村啓信先生の『校本日本書紀』編纂を補助され始め、以降研究所の業務に深く関わった。この中村先生との出会いが青木先生の学問形成のもう一つの契機である。校本作成の作業は勿論の事、中村先生のお供で天理図書館に写本の調査に出向くなど文献学の研究法を親しく手解きしていただき、また古事記の研究史の重要性を指導されたものと思われる。研究史の初期の論文（第Ⅰ編第一章から三章）は三本とも國學院大學日本文化研究所関連の書籍が初出である。中村

先生との出会いはそのまま古事記学会との出会いといってもよい。

青木先生は大学院生時代から、古事記学会の運営のお手伝いをされて、大会の折にはいつも受付の席に座っておられた。昭和五十四年、國學院大學兼任講師として初めて教壇にお立ちになった年に國學院大學の中村先生の研究室に古事記学会事務局が移ってきた。それ以降青木先生は「委員」「評議員」「理事」として学会運営の実務に携わってきた。古事記学会は、創立総会を昭和二十八年に開催しているが、その二年前から研究例会が開かれており、第一回は石井庄司氏の「古事記研究史—谷森本について—」であり、学会誌「古事記年報」第三号が「古事記研究史特集」であるように創成期から研究史を重要視してきた。その学会誌「古事記年報」には、時折欠けることもあったようであるが、巻末に「研究年表」という年次ごとに出版された研究論文の目録を掲載してきた。青木先生もこの「研究年表」を早くから担当され、毎年出版される研究論文に目を配られており、担当を外れてもその習慣は絶えることがなかった。やがて昭和五十八年に古事記学会創立三十周年を迎え、記念行事として『古事記研究文献目録』（国書刊行会）を刊行する運びとなった。かつての「研究年表」の組み換えではなく、明治初年から昭和五十九年までに刊行された全ての単行本・雑誌・紀要類に掲載された古事記及び関連文献の論文題目を網羅することになった。全体の監修を中村啓信先生・菅野雅雄先生（院友・元中京大学教授・前古事記学会代表理事）が担当され、青木先生が実務担当として調査の陣頭指揮にあたられた。編集担当者は青木先生と共に国立国会図書館・国文学研究資料館・國學院大學図書館の書庫に入り、書籍を実見してカードを取り分類した。雑誌論文篇の完成は昭和六十一年、単行書篇は平成四年までかかる事業であった。何回もの泊まり込み合宿を経ての編集作業であったが、青木先生は毎回参加され、自身の「研究年表」作成の経験を踏まえ、研究史の大切さを後輩たちに身をもって伝えておられた。

この創立三十周年にあたっては「新古事記大成」の計画（これはそれ以前から数次目論まれていた）も立てられていたが紆余曲折があり果たせず、平成三年になりようやく『古事記研究大系』の編纂がスタートした。その第二巻『古事記の研究史』（高科書店平成十一年）の編集担当が青木先生であった（この本の青木先生の論文は第Ⅰ編第五章）。『古事記研究大系』の各巻は、依頼原稿と投稿原稿を組み合わせて構成されていたが、この「研究史」の巻だけは依頼原稿のみで構成されており、編集委員会

の意向が強く反映されているのであるが、最初の計画にあった「古代文献に見える古事記（古事記引文の研究）」の論文は掲載されなかった。このことを青木先生は大変に残念に思われ、「あとがき」で次のように記されている。

残念ながら諸般の事情で、最初のテーマの論文は収載出来なかった。その点もお詫びすると共に、その欠を補う意味をもつ引文（逸文）の研究を、別な形で完成することをお約束したい。

これは古事記学会が謄写版で出した『古事記逸文集成稿』という小冊子に再評価・検討を加えるという目論見であったが、青木先生の「古事記引文の研究史」へのこだわりがこの「あとがき」に滲み出ており、その願いは先生の編著である『古事記受容史』（上代文学会研究叢書　笠間書院　平成十五年）で結実する。本書、著作集下巻『古代文献の受容史研究』という書名は、この編著の題目に由来する。出発は「逸文」という題目であったが、『古事記』そのものは完本として伝来しており逸書ではないので、「逸文」という呼称には問題があった。そこで古事記を引用した文献の引用態度や方法の検証という見地から「受容史」という名前に落ち着いたと「はじめに」に記されている。

この上代文学会研究叢書のシリーズは、上代文学会が学会活性化を目指し、テーマ別に五組の分科会を結成しそれぞれの研究成果を纏めたものである。青木先生がその分科会を主宰するにあたっては、先述の古事記研究大系第二巻『古事記の研究史』での「約束」が念頭にあったことは間違いないであろうが、研究大系での計画は一本の論文であったはずである。それが、この『古事記受容史』では、研究会活動時に九名の発表者、書に記載された論文が十三本、それに加えて資料編1「比較一覧三本」と資料編2「引用書解説と引用文校異一覧十八種」に拡大している。資料編は研究会活動の中から生まれたものであるにしても、論文十三本を生み出したテーマは研究大系の時の課題意識とは異なっているものと思われる。青木先生がこの分科会を引き受けた時には「日本文芸学史」という大きな構想により膨れ上がっていたのではなかろうか。

『古代文献の受容史研究』を理解するために、青木先生の「研究史」に関する足跡を概観してみた。青木先生の学問の特徴の一つ「研究史」への深いまなざし、それは内野吾郎先生の薫陶に始まり、中村啓信先生を介しての古事記学会の研究史研究の

伝統との出会い、学会の研究活動を通しての深まりの中から形成されてきたと言ってよい。内野先生の学問理念の出発点は折口信夫の「上代文学史」の講義にあるという。中村先生の学問は武田祐吉の文献学を基盤とするのは論を俟たないであろう。両者の交わったところに青木先生の学問があり、青木先生はその中に國學院の学統を意識し、これからの國學院の学問のあるべき姿を求めていたと思いたい。本書の第一編第七章「『古事記』を通してみた国学的研究―宣長から折口・武田へ―」の題目はこのことを青木先生自身が強く意識していたことを典型的に物語っている。この論文の最後に「今後の課題」として内野先生の『新国学論の展開』の序章を引用していることでもそれは理解されよう。

青木先生は教え子に「稽古照今」（『古事記』序文）の文言を通して研究を語られたという。また『古事記の研究史』（古事記研究大系・第二巻）「あとがき」において「研究史への反省と批判なくしては研究はあり得ない」と断言されている。内野先生は『日本文芸研究史』で「学史には、現在の学問の水準と由来を知り、その将来への展望を予測する、という重要な意義がある」と記される。「学史・研究史」が今と将来を見据えてのものである以上、「受容史研究」は古びることのない研究テーマであろう。この青木先生の著作集が広く永く読み継がれることを願う所以である。

（A5判、五九二頁、おうふう、二〇一六年五月発行、定価一二〇〇〇円＋税）